

「調査依頼」を 考える

都筑区 総務課 平成6年入庁

井熊 良江

私は文書担当である。ふだんあまり仕事のつながりのない局区部課から、時々メールが届く。「あつ、調査だ。」先輩職員の話によると、区は業務が多岐にわたるため、調査依頼が非常に多いということだ。調査依頼の文書を見て、感じることが二つある。まず第一に、その調査を行う目的が明確に示されていないという点、第二に複数の部署で似たような調査をしている、という点だ。

まず第一の点である。もちろん調査は、情報収集や実態把握のため重要だ。また、同じ組織で働く機関として、他の部署で必要としている情報を提供するのとは、ごく当たり前のことだ。しかし、その調査の必要性が受け手にとって分かりにくい場合が多い。当然だ。受け手が発信者と同じ立場でその仕事をしていく訳ではないのだから。日々、私達はみなそれぞれの部署でそれぞれ違った仕事をたずさわっている。まして関心を抱くことのできない仕事は、なおざりにされやすい。限られた条件の下、目的を達成するには、やはりまず依頼文上でその目的を明確に示し、相手にその調査が何のために、どうして必要なのかはつきり認識させることが重要だ。目的が示されれば、受け手もその内容にそった回答ができるし、「ああ、そういう事なら」と、発信者の思ってもみななかった有益な情報が、別の視点を持つ受け手によってもたらされるかもしれない。「該当なし」の回答文ほど、面倒もない代わりに味のない文書はない。

第二の点についてであるが、これは無駄だ。調査するということは、受け手と同様発信者にとっても面倒にちがいない。もし必要な情報について、既に調査がなされていると知りえたなら、重複して調査することもないだろう。もつと局区部課の枠をこえ、情報の共有化を図るべきだ。「そうだ、調査したい案件の調査をしたら?」「でもそれじゃあ、調査が一つ増えるだけ:」しかし、調査対象が重複している場合に、調整・統合する制度があったらよいのではないか。「担当になったら面倒じゃない」などと思わないでほしい。あなたのおかげで助かる人が必ずいるし、これを機に局区を横断した今までにないすごい事業が生まれるかもしれないから。

以上、いろいろ書かせていただいたが、私は調査をするのもされるのも、とても苦手だ(この件で電話をいただいた時も、調査提出の催促かと思つたほどだ)。しかし、普段交流のない局区からメールが届くのは、何となくうれしい。「こんな仕事をしている課もあるのね」などと感心してしまうこともある。これも一つの出合いなのだ。大切にしよう。

あとがき

「芸術の秋」。秋に限らず、芸術文化への人々の関心は高い。市立大学の「アートマネジメント講座」には定員をはるかに超える応募があった。

一方で、芸術なんてという人もいる。一人ひとりの考え方がばらつきの多い領域である。そこに行政がかかわろうとすると難しさが出てくる。

難しいのは行政だけではない。芸術文化にかかわる人それぞれが悩みを抱えている。資金、会場、人、企画、組織運営……様々な悩み、困難を抱えつつ、それを乗り越えている「達人たち」がいる。

本号の特集では、芸術文化への行政、市民のかかわりにスポットを当ててみた。「行政は芸術文化にどうかかわるべきか」という古くて新しい問題について、まず論じてもらった。次に、具体的な芸術文化活動にかかわった人たち(行政、市民)に、活動を進めるためのノウハウを語ってもらった。

取材から編集までの作業を通して印象的だったことが二つある。いずれも座談会に出てくるが、一つは個人の熱意の重要さ。活動する「達人たち」に運営の秘訣をたずねれば答えてくれる

が、形だけまねてみても失敗に終わる。もちろん、熱意だけでは物事は進まないが、「熱い思い」がなければ始まらない。その証拠に、皆、活動への思いから語り始めている。

もう一つは人のネットワークができていくこと。原稿を依頼するときに、他の執筆者のことが話題にあがる。「〇〇さんも書くんですか。よく知ってますよ」と、意外なつながりを知る。おかげで、助けられたことも多々あった。

いずれも人の問題。芸術文化というテーマから、考えてみれば当然のことかもしれない。

「読書の秋」。今紹介の「新市民時代の文化行政」は好著であり、ぜひおすすすめしたい。

△安楽岡▽

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「自主研究レポート」への投稿をお待ちしています。応募される方は、事前に研究の概要をA4紙三枚以内にまとめて企画局政策部調査課までお送りください。FAX 六六三一四六一三 お問い合わせは、電話六七一一二〇二九